

豊後高田奥畑伊勢参宮道記

安藤信郎

豊後高田市文化財保存会委員安東宗一郎氏の御案内で、同市奥畑の後藤功氏のお宅を尋ね、鞍懸城聞書の事という巻子を拝見したが、その際目に止ったのが「伊勢参宮道記」とでも名付けるべき表紙のない横帳、横20cm、縦13.6cmの和紙の帳仕立の一本である。

内容は正月廿一日奥畑を出発して、閏正月十八日七ツ時伊勢につき、帰路船で「みたらい」に着いたのが二月九日。十日、十一日とみたらいで風待ちをすることで終っている。

江戸期以前に本地方から参宮した記録は、県史料所収の朝見八幡文書に散見する。天正十五年二月の永安帯刀助(同史料に有安帯刀助統固或は単に統周等の文字が見える同一人物の疑ももたれるが今はそのことにはふれない) (異筆豊後国北浦部之内高田ヨリ) や吉

弘嘉兵衛をはじめ、加兵衛の子息三人、まつゆき村綾部平左衛門允等の参宮があった事が伺える。しかし道中記はない。江戸

期には三浦梅園による「東遊草」があり、かなり具体的な事が記されている。又「嘉永五年子とし春、松翁五人連れにて上ミ方

へ登る伊勢の国はじめ、大和国、山城国、摂津国、瀬戸内諸所見物す、道の記、別有。」と佐々木高秀(松翁) はその見聞録に

記しているが、道記はみつかっていない。明治になると豊後高田市草地長添から参宮日記の断片が出たが簡単過ぎる。松翁及び長添は船旅であったと思われる。東遊草も途中から乗船している。奥畑の道ノ記は麻里布―宮島―地御前の間と尼崎―大阪

の間を上船するだけで往路は渡舟以外は用いていない。真玉町桑原清氏の御好意で伊藤常足の「伊勢はまをぎ」⁽¹⁾という参宮の手引書を見ることが出来たが、常足は尼崎の条で「この辺より大坂安治川まで三り、便船あり、陸は川多くしてわるき所なれば船にのるべし」としている。(嘉永五年の写本)

山陽道については室町期の今川了俊の「道行振」や宗祇の「筑紫道記」が吉田東伍の大日本地名辞書にふんだんに引用されている。県の「歴史の道」シリーズの勅使街道や行幸会道の研究もあり、「伊勢街道」の研究も進み、更に角川の府県別地名辞典の編纂も進んでいるので、宿泊地や休息地等については之と云った事もないが、江戸期の道記と推定される奥畑伊勢参宮道記はその時代の庶民の綴ったものとして興味を引くものがある。お蔭参りでなく、伊勢講を作り路銀を出して細々とした徒歩の旅を続け、夜はおそらく暗い行灯の光で矢立ての筆を走らせ聞き覚えの地名や宿名、木賃や米の値段を書き、待望の高野や伊勢の宿では料理の献立まで書き記し、川に出合ふと橋の種類や、長さ、渡しの舟賃等々を数少ない文字を苦心しながら使用して書いている。食うが無筆の旅日記といわれた時代の庶民の綴った日記としても珍しいものである。

勅使の権威もなく、了俊や宗祇、常足や梅園の文才もなく、ましてや松翁の富もない庶民の聞き書きである。それだけに興味もあるが読みづらくもある。途中で日付もあやふくなるが前に挙げた各書を参考にしながら「東遊草」と引きくらべ地名を推定し、一日行程毎に整理してみたが、推測できない事柄や品名地名が出たことは残念である。広く賢智の御教示を仰ぐ他はない。

○正月廿一日。か嶋立。夫々宇佐参り。夫々四日市中食いたし。夫々福島長久寺様参り。夫々中つ嶋田口磯右衛門様とまり。きちん拾八文。米代宅升付七拾文。

。鹿島立。宇佐「参り」を参拜の意とす。以下宇佐八幡、長久寺(天正八年福島長久が福島城跡に建立した寺)大貞八幡(薦神社)に参拜したことを記す。尾佐田は大佐田ともいう、何か大宇佐田を思わせる。大貞から中津島田口に出る。きちん川木賃、長い旅である木賃宿に泊り、米を買って旅をつづけている。

廿二日 高せ川、ふなちん式文。夫方くつ川。夫方あかくまとをり。夫方四やとをり、中食いたし。夫方しんでん山にて休申ゆ。夫方かんだ中津屋とまり。きちん廿六文。米壺升付七拾文。

。高瀬川―山国川、。くつかわ、沓川、明治三年の陸測五万分之一地図によると三毛門村沓川、岩岳川の東部にある。赤熊、同じ地図宇島町赤熊、同地図には豊州線（日向には行っていないので日豊線ではない）が赤熊北部を横ぎっている。

。四やは椎田で、中食した。しんでん山は、しんでんばる。

東遊草では中津寺町―高瀬川―天仲寺―くつ川―はちや―しやうゑ―湊―椎田をへて新田原―羽根木で泊っている。

（廿三日） 夫方そねとをり。夫方ゆ川とをり。夫方あだち山参る。夫方小倉中津口にてあん内参り。夫方倉元屋喜三良様参り。夫方大はしけんぶついたし。夫方しろけんぶつ仕ゆ。夫方廿三日にて、小倉よりふねにてのり。うんちん八拾文。きつ銭貳拾文出。廿三日下之関わたし。あかま町やながわらや治兵衛様とまり。きせん四拾五文。米壺升七拾文かゑ。

。曾根。湯川は足立山麓の足立の北西。あだち山は東遊草に即非の墨蹟として広寿名山福寿禅寺とあり云々とある。黄檗宗の名刹、こゝで豊後高田と広寿山の関係を説明すると六郷山本山本寺の一つ応利山報恩寺が退転した後、黄檗僧無方が中興し報恩寺は黄檗宗寺院となる。無方は延宝八年応利山で示寂、今応利山に残る無方の墓碑銘を原文のまゝ示す。

応利山無方山主之塔と題し山主名実至、字無方、肥州長崎人、年二十七拜隠老和尚発心為僧、尋婦広寿、受其戒、又進槩山、授菩薩戒、為人朴实常以禅定為務、初来応利、托鉢行化者数載、里人信服、悉知敬三宝、於是、起闕遺跡建堂二字以 安開基仁聞大徳所彫観世音像又創室廬厨房、銅造鐘并門閣遂革教院、為禪苑、郡守施山林田細若干畝 以資香積 此皆山主篤実感人之所致、可謂其功多矣

延宝八年十月二十一日 安座而卒年五十二其徒等 為塔葬干山之東 銘曰

道心堅固 惟禪是務 拽石搬土 創茲院宇 有功不處 乘化而去 後之住侶 無違厥緒

天和三年歲次癸亥二月二十一日 実海智大 際清実暁 際定実義 実融覚□

無方は広寿山で戒を受けた僧である事がわかる。なお、黄檗山万福寺の開祖隠元は延宝元年に示寂、この他田染平野陽平にある日陽山福

(元禄十六年)

(元禄二年)

寿禅寺には広寿山僧の撰文のある一字一石塔があり、この塔の造立に当った僧広修は真木大堂にも造塔しているなどこの地方にも広寿山の信仰が広がっていたことを示す。足立山も清麿の伝説から、禅寺としての参り所に変っている。

。うんちん八拾文 (吉田東伍著大日本地名辞書を以下「東伍地名辞」と略記する)

「東伍地名辞」所収の大内家壁書文明十九年条々「浦役銭 関と小倉の間三文、門司の間壹文、赤坂の間貳文」等がある。

。きつ銭。喫飯、喫茶、喫煙等の喫銭、飲食代のことか。あん内参る伊勢御使の案内役、秋から暮に祈禱札や伊勢曆をもって村々を廻り春の参宮の予約をとり、定めの日定め場所が集まった人々を伊勢へ案内した。豊後の伊勢御使は福島御塩焼大夫(朝見八幡文書)と見え、今でも村々には福島御塩焼大夫書天照皇太神の軸が掛けられている。伊勢の宿でも「太夫様参る」の記載をしている。今回の案内役は倉元屋喜三郎。あかま町、東遊草も羽根木(刈田町)から赤間町を一日行程としている。

(廿四日) 夫々長ふとをり。夫々かんだとをり。夫々長ふのうちうべ村やすみ。夫々かんだばし、此はし拾六間。石ニかなぐにて御座ゆ。下之関御くらく寺御こじういのみだの(如)らい様参り。夫々よし田休申ゆ。夫々はしあり。此はし三拾六間あり。夫々石ばしあり、廿七間あり。夫々あさ町とをり。夫々とをげこゑ。夫々石ばしあり。此はし拾七間。夫々ふなき町ひこや清右エ門様とまり。きちん廿六文。米壹升二付六拾八文かへ。あかまが関方九り。

。「長府とをりの後のかんだとをり」を筆で円く囲んである。考えがまとまらなかったようである。この附近に二つの神田がある。この神田は神戸郷神田で今の下関市豊浦附近。神田、滝部、粟野の諸村を神戸郷といった。神田川、豊浦郡神田郷(今小月村、清末村、豊東前村トヨヒガシマエ等)神田は豊東前の大字として残り、川の名を神田川という。(東伍地名辞)

石ニかなぐにて、石橋で金具で止めてあったことか。御くらく寺御こじういのみだのらい、極楽寺五劫思惟の阿弥陀如来。吉田、吉田川は源を大津郡俵山に発し南流西市を過ぎ小月村の東に於て海へ入る。厚狭郡吉田村をも経由するので吉田川といふ、又多羅川ともいふ。(東伍地名辞) 現在豊浦郡豊田町にある豊田湖から流れる木屋川、吉田から下流吉田川。この橋三十六間、廿七間の石橋は厚佐川の橋。あさ町、厚狭は倭名抄安豆佐、今厚西村大字厚狭存す、船木の西一里麻の字も用い、了俊はあさの郡コサツリという里に宿をとり、宗祇は今宿という所に宿している、今の厚狭市は厚佐川の東岸にあり宗祇の今宿で、了俊の郡といったのは西岸である。(東伍地名辞)

。とをげこえ、西見峠

。ふな木町船木、今舟木村という山陽道の駅次にあたり、厚狭郡の郡治とする、赤間関を去る九里、山口を去る八里、宗祇も「此船木といへるは神功皇后御舟を作り給ひける所となん」と記している。東遊草には宿のあるじの話として「むかし神功皇后、この地にして楠をきり船をつくるによって船木という。その根地に入て石となる、よくもゆとて囲爐にたきけり、その臭甚だ悪し、吾つくし豊前、筑前にも是を出す」としている。また舟木の地藏院は長門の永福寺で出家した大友政親が、大内義興に詰め腹を切らされた所でもある（渡辺澄夫、大分の歴史）

(廿五日) 夫方ふたまた川。きさ村ふなちん八文つゝ。夫方山中しくまでふなきより式里。一田川にて中食仕ゆ。夫方をこりとをり。ふなき方をこりまで^五利。をこりにて休申ゆ。夫方山口内ゆだ町わたなべや作兵衛様にてとまり。きせん三拾貳文つゝ。米壺升付七拾文 正月廿五日。

。ふたまた川の表現は後にも出てくる、川の分岐点か、あるいは合流点の意味であろうが、ここでは次のような固有の地名もある。中山、車地、瓜生野等を併せ二俣瀬と改称す。(東伍地名辞) 五万分之一地図によると厚東川をはさんで西に瓜生野、木田、東に車地その東に山中がある。山中の東二里に嘉川がある。宗祇は「山中といへる所に聊かなる社有」と記している、山中は道に沿って東西に上市と下市に分かれ社は上市にある。

。きさ村「ざ」は「だ」の聴き違いで木田であろう。ここで渡舟に乗り渡河したものか。一田川も嘉川(かざわ)の聴き違いと思われる。をこりは小郡、「山口の西南三里なる大村にして上郷・下郷の二つに分つ、東大寺要録に長徳四年吉敷郡^{フシキ}榎野庄とあるもの是也」(東伍地名辞)

(廿六日) 夫方ゆだ町たち。夫方山口大神宮様参り。夫方ひかみ山、門^{カド}さきとをり。まゑにて板はしあり。此はし三拾四間あり。夫方ひうらぎ大明神前とをり。夫方さば山こゑ。夫方みやいち天満宮様参り。にしむらや幸吉様とまり。きちん廿四文。米壺升二付七拾三文かへ。まゑにてふなばしあり六さう。

。山口大神宮、常足は「中ノ関につくことあらば山口大神宮、又宮市天神にも参りて又中ノ関に帰るべし、往來拾里に近かるべし」と書

いている。

。ひかみ山、氷上山興隆寺、妙見宮、釈迦堂がある。・前に榎野川上流仁保川が流れている。・ひうらぎ大明神、終大明神。・さば山は佐波山洞道附近。・佐波川について東遊草に里人の話として「俊乗坊重源大仏建立の時東大寺の材木をこの川上の山にとる云云、俊乗坊きくつをとり鯖の字を書、川に投ず、きくづ尽く化して魚となり……是より錦川をあらため鯖川という」と記している。

治承四年災上した東大寺復興の大勲進俊乗坊重源に東大寺造管料国として周防の国が与えられた。国司重源の治世を物語る伝説。(東伍地名辞)に「宮市、佐波村の市街にして三田尻の北に隣る。松崎天神あるを以て此名あり、中世大内此地を駅市と為し、号して防府と云ひ云云」。紀には沙磨、沙塵、沙婆を用いている。豊後風土記に云う佐波津は沙婆の津(三田尻)と釈されている。紀では景行天皇十二年九月甲子朔戊辰、到周芳娑婆、とある。

まゑにてふなはし云云、山口からは佐波川を渡って、宮市天満宮に至る。東遊草に「鯖川を船橋かけて宮市の町に入」としている。

(廿七日) 夫がそこくぶんじ前とをり。夫がせとごゑとをげとをり、ぶんご地山みゑ申ゆ。夫がとのむの町、夫がつば山こゑ、ふく川町、夫がとん田町、夫が徳山町、夫がはなをか。夫がしをりかたを。夫がくふいち町、夫がたをいち町。夫がよふさか。あかまがせきが廿九り。よぶさかちあや弥市良様とまり。きせん三拾文。米芚升二付六拾六文。廿七日みやいちがよぶさかまで拾利半。

。そこくぶんじ川周防国分寺。東遊草でこの辺りを見ると、国分寺の門より、あみだじ(北東の上坂本にある、さきの俊乗坊重源が文治二年料国下向の際、創建したといわれる。又は佐波川の次に「是より行事一里左のかた阿弥陀寺あり俊乗坊これをひらく」としている。)のかたを望み、うけのの宿(浮野の宿)に足もとめず、うけの坂(浮野坂)をこえずへ田(末田)というを過云云、うけの坂にのほり南のかたを望めば古里ちかくみえて四極の山も遠からず、足びきや兩子の峯、夫と定かにはわかたねど、霞のひまにはのみえて姫島は春の麓に打たくる地つゞきたるがごとく云々」としている。国東半島はこの辺りの真南にあたる。奥畑後藤日記は「せとごゑとをげとをり、ぶんご地、山みゑ申ゆ」川(瀬戸越峠通り、豊後路山見え申ゆ)。

この道記には叙情的というか感情を表わす表現はない。この様な叙事の中にためている心の動きが見られる。芭蕉の「古池や」に通ず

る表現である、この事については後に記すことにし、ここでは略す。・とのむの町、東伍地名辞では「勝間郷、和名抄佐波郡勝間郷加都麻今富海村是なり。東は都濃郡に接する海村なり。延喜式（兵部省周防国駅馬）に勝間駅と云い、生野と防府の間とす。今福川へ二里半、宮市へ一里半、三面皆山とす。」とある。

つば山トノミ樺峠、了俊は東から西へ進んだので、この峠を西にこえて「麓なる大なる嶋は姫島とて豊後の国なるべく、此海づらは波いとたかし。是より外の海になりぬぞと申める。やがて浦の名をも外トノミの海という也。」

又安西軍策からの引用で「永禄十二年十月大内輝弘敗走、浦々に船もなく富海まで落けるが、敵は樺が峠に待懸、追手の者も浮野の坂を越えければ輝弘身も勞れ、特に無勢なれば左の方茶麻マ（白か）山へ取上、節所マに扣て陣取たり、廿五日の早朝、元春朝臣浮野峠へ打上給て、旗頭見えければ、輝弘今は是迄也と腹一文字に切給う」（渡辺澄夫、大分県の歴史P104大内氏略系図参照）

。ふく川トノミ福川、徳山と佐波郡富海の間なる一駅なり、南面して海湾に臨む、今新南陽市。とん田町トノミ富田、今新南陽市。はなおかトノミ花岡・下松市内花岡八幡（和銅年間宇佐八幡を勧請）がある。

。しをりかたを・周防かたを不明、中村あたりか。くふいちトノミ久保市。たをいちトノミ呼坂、延喜式（兵部省）周防国駅馬の中に周防として挙げているところ野口と生屋の間にある。（東伍地名辞）に「今呼坂なるべし、今大河内と相併せ勝間村と改称す。山の中の一駅なり」。現在熊毛呼坂「式内社熊毛神社」は呼坂にある。（未完）

参考文献

- 。読史備要 東京大学
- 。日本書紀 坂本太郎他
- 。五万分之一地図 国土地理院
- 。四十八年修正版 厚狭、小郡、山口、防府、徳山、岩国
- 。五万分之一地図 大日本帝国陸地測量部
- 明治三十八年 明治三十九年 明治三十七年 明治三十二年三脩 昭和二六年

行橋 中津 箕嶋 二十万分之一 小倉 宇佐

。伊勢はまおき 嘉永五子夏写本主末松茂兵太（内題、伊勢浜萩後之折敷）

。東遊草 豊国東三浦安貞草（梅園全集）

。角川日本地名大辞典

。吉田東伍 大日本地名辞書

。渡辺澄夫 大分県の歴史

。平安遺文

。「歴史の道」調査報告書「勅使街道」・同「行幸会道」

。中津藩 歴史と風土

。延喜式

会 告

※ 会費のご納入は、次のいずれかでお願ひ致します。

- (1) 郵便振替口座 下関八・一五・二九四 大分県地方史研究会あて（振替口座が変更になりましたので御注意下さい。）

- (2) 大分銀行県庁内支店・通普通預金口座 一六・四三・二一一 大分県地方史研究会あて

※ 会員の方で、本誌以外に論文等を発表された時は、抜刷等を本会あてお送り下されば幸いです。また出版された時は、チラシか出版物をお届けいただければ、販売のお手伝を致します。